

## 朝鮮通信使の交流と焼画

片山 真理子（京都工芸繊維大学）

---

本発表では 1811 年、対馬での朝鮮通信使の美術の交流において焼画が行われた事例を紹介し、朝鮮通信使での交流史上初の焼画の出現には当時の日本と朝鮮においてほぼ同時期に焼画に専念した人物の存在を考察し、その受容にはともに諸侯の手になる取り扱いがなされた様相を明らかにした。

ここで紹介する焼画とは、火筆画や焦画、烙画ともいい、金属の筆先を焼き、画面に押し当て、焦して描く絵画である。その極意はあたかも水墨画を彷彿とさせる運筆や濃淡の妙を見どころとするものである。江戸時代、12 回来日した使節団朝鮮通信使との文化交流において確認できる作例は詩歌、墨跡、墨画を挙げられ、席画における画賛なども見られる。それらは詩書画を主体とした墨戯であり、毛筆によった交流がその基礎をなしている。そうした流れにあって朝鮮通信使が来日する最終回であり、対馬までの来日である。前回は 1764 年であり、約半世紀ぶりの来日である 1811 年の対馬での交流の場面に焼画が登場することが文献上で確認できるのである。

また、朝鮮通信使とは別に日朝両国において焼画で名を馳せた人物が存在する。近江の山上藩主稲垣如蘭（1762～1832）と密陽朴氏家門の両班朴昌珪（1796～1855）である。稲垣如蘭は藩主という立場があり、市井の絵師のその所業とは大きく異なった境遇の人である。大名の余技として、その技を極めた稀な人物と言えるだろう。焼画と稲垣侯については塙保己一や屋代弘賢の記述に見られる。一方、朝鮮における烙画の大成者朴昌珪（1783～？）は、火画道人といわれ、全州で活動した。慶尚道密陽朴氏家門で支配者階層の両班（ヤンバン）の出身であり、日本の稲垣如蘭も両班と格式としては同様の諸侯の家柄であり、幼少の頃より文化的な素養を肌で親しむことのできた人物である。

1811 年の通信使の来日は、おなじ来日といっても対馬までであり、それまでの来日の様子とは異なる極めて儀礼的な側面もあるが、美術の交流においては墨戯の交流のほかに焼画が行われたということもまた、記憶しておくべき特徴であろう。なお、『香亭雅談』での李文哲の称賛した猪飼の焼画の存在とともに見逃せない記事がある。『古畫備考』四十七倭絵「焼繪」末部に「○焼繪は朝鮮にもありて、来朝人のゑがけりと云、紙本の山水見しことあり、其技亦拙からず」である。「来朝人」とはつまり朝鮮通信使をさす言葉である。来日した人物のなかに烙画をたしなむものが含まれており、日本人のために山水図を描いて見せたと解釈できるのである。

今回の発表ではこれまで紹介されたことのない「焼画」の実態解明をする。特に 1811 年の朝鮮通信使の交流における焼画の位相を紹介するとともに、日朝両国での焼画を取り巻く状況の整理を試みた結果、日朝両国において稲垣如蘭と朴昌珪という二人の焼画制作者が存在したことを明らかにすることができた。